



TITLE:

カメート語音素体系の記述と比較 言語学的考察

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

CITATION:

三谷, 恭之. カメート語音素体系の記述と比較言語学的考察. 東南アジア研究 1965, 3(3): 22-51

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55091>

RIGHT:

カメート語音素体系の記述と 比較言語学的考察

三 谷 恭 之

A Descriptive and Comparative Study of the Khamet Phonology

by

Yasuyuki MITANI

1. 序 論

1.1 はじめに

私は、京都大学東南アジア研究センターの現地調査計画のひとつである西田助教授担当の「北部タイにおける諸言語の現地調査」に参加して、1964年9月から1965年4月にかけて北部タイでいくつかの言語を調査した。私が調査の対象とした言語は、⁽¹⁾ラワ語 (Lawa) 3方言、カメート語 (Khamet)、カム語 (Khamu)、ビス語 (Bisu) 2方言それにモン語 (Mon) であって、ビス語を除いてはすべてモン・クメール系 (Mon-Khmer) の言語である。

ラオスやビルマにくらべてタイには少数民族の言語はあまり多くない。LeBar 博士らによる大陸部東南アジアの言語民族分布図⁽²⁾をみてもタイ国の領域内はほとんどがタイ系の色でぬりつぶされている。しかし北部タイに関する限りわれわれの常識からいえば言語の種類が少ないとは決していえない。いまこれらの言語についてより詳しい分布地図を作製しようとしてもその試みは十分には成功しないであろう。それはたとえばタイ系の言語・方言が互に漸次的な相異しか示さないというような事情にもよるけれども、その存在が知られていない場合はもちろん、漠然と存在が知られている言語についても一体どの地域でどのような方言が話されているのかという具体的な点になるとよくわかっていないからである。

私の当面の関心事は、いわゆるモン・クメール系とよばれるグループの言語が実際どのよう

(1) この調査にあたり、京大側の諸先生方に指導と援助をしていただいたことは申すまでもないが、現地側では Saphawichai haeng Chat, Phuwaratchakan Changwat Chiangmai, Nai lae Palat Amphoe Hot, Nai Amphoe Wiang Papao その他多くの人人から御配慮と協力をいただいた。とりまとめて謝意を表しておきたい。また村の人人ことにインフォーマントとなってくれた人たちは、同じ発音を何度も繰返すというとてもない仕事をよく辛抱してやってくれたので特に感謝する。なお、この調査の行程等についてはすでに拙稿「ラワ語の現地調査」本誌第3巻第1号 pp.150-153 に述べたから省略する。

(2) cf. F.M. LeBar &c. *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. HRAF Press, New Haven, 1964. の付録。

な系統的な関係を相互にもっているのかということであるが、このグループの諸言語の分布地域は島嶼部を除く東南アジアの全域にわたって⁽³⁾いて、その数は大変なものである。それらは一部を除いてすべて少数民族の言語であって、言語学的な調査研究はほとんど行なわれていない。

今回私が行なった調査はその全体からみればまったくほんの一部分に過ぎないけれども、以上のような事情を考えれば、その結果を報告することはいささかの役に立つことと思う。本稿はいわばその予備的報告の一部をなすものである。

1.2 「カメート」語という名称について

本稿で扱っている「カメート」語とは、北部タイのウィエン・パパオ (Wiang Papao) の町から約 5 km ほど北方のパンチョーク (Pangchok) という小村 (約30戸)⁽⁴⁾ で住民同士が話す言語であって、この地方のタイ人たち (Khon Muang) はこれを “Lua” すなわち「ラウ」とよんでいる。⁽⁵⁾ 実際この言語とボールワン (Bo Luang) やウンパイ (Umphai) などのラウ語とは相当に近い関係にあるようであって、今までにもこれを「ラウ語ウィエン・パパオ方言」として言及されたことがある。⁽⁶⁾

しかし話し手たちの自称では /Rēmèet/ であって⁽⁷⁾、これは北部ラオスの “Khamet” (“Kha) Lamet” などとよく一致する。ラオスのカメート語 (ラメート語) の言語学的な記述報告がないので細部にわたる具体的な点はわからないが、次のような例で見るとこの言語がラウ語よりもカメート語の方言であることは明きらかである。⁽⁸⁾

- (3) H. L. Shorto, J. M. Jacob and E. H. S. Simmonds : *Bibliographies of Mon-Khmer and Tai Linguistics*. Oxford Univ. Press, London, 1963. にはモン・クメール系として実に136の言語名があがっている。その多くは同一言語の異名ではあるが、本書に含まれていないものが実際には随分あると予想されるから、いずれにせよ相当な数にのぼることは確かである。
- (4) Ban Pangchok, Santonpau Mu thi 1, Tambon Sansali, Amphoe Wiang Papao, Changwat Chiangrai.
- (5) もっとも、一般には、かつてこの地方に “Lua” 族が住んでいたが現在では “Khon Muang” になってしまってその言語も話されていないと思われていて、ウィエン・パパオの町でさえ今でもこの “Lua” が話されている事実はほとんど知られていないようである。
- (6) cf. Sanidh Rangsit : “Beitrag zur Kenntnis der Lawasprachen von Nord-Siam (Mit Vokabularien).” *Anthropos* 37-40, 1942-45, pp. 688-710.
- (7) 別に /lúaʔ/ があるがこれはタイ系借用語である。ラウ語の自称 /ləvuaʔ, rəvuaʔ/ に対応する形は /Rəwà(a)ʔ/ でなければならない。
- (8) WPP. はウィエン・パパオ方言。NT. はカメート語ナムタ (Nam Tha) 方言, P. Lefèvre-Pontalis : “Notes sur quelques populations du nord de l’Indochine, II”. *JA* 9e sér. 18, 1896. pp. 129-54, 291-303. による。Kraisi. は, Kraisi N. : “The Mrabri Language.” *JSS* vol. LI pt. 2, 1963, pp. 179-184. Appendix I. に見えるカメート語でインフォーマントの出身地が明らかにされていないがおそらく北部ラオスと思われる。BL., UP. はそれぞれラウ語ボールワン方言, ウンパイ方言。

	WPP.	NT.	Kraisi.	BL.	UP
《ブタ》	liik	lik	liik	lɛic	leic
《手》	tiiʔ	ti	tiʔ	taiʔ	teʔ
《石》	Rəʔaaŋ	raagne	khaʔaaŋ	(səmDuʔ)	(səmoʔ)
《ヘビ》	phuŋ	phigne	phiŋ	(səʔəuŋ)	(səʔoiŋ)
《頭》	Ntɔh	ndor	dɔh	(kain)	(kaiŋ)

それゆえ私はこの言語を「カメート(ラメート)語のウィエン・パパオ方言」とよびたいと思う。

カメート語とラワ語がかつては非常に似ていたことは疑いが無い。第3章ではカメート語・ラワ語・カム語を同じレベルで考察したけれども、それは北部モン・クメール諸言語の相互関係を明らかにする手がかりとなりうると思ったからであって、実際にはこの3者が完全に鼎立した関係にあるのではなく前2者の間の関係が最も密であることはまず確かである。このことにとって、カメートがラワと同じく“Lua”とよばれている事実は極めて示唆的であるかに見える。しかしながらこの“Lua”という呼び方について事情はもう少し複雑なようである。

今回私が調査する機会をもったものだけでも3種類の言語が“Lua”とよばれている。すなわち、(1) ボールワン、ウンバイ、メーサリエン(Mae Sariang)などで話されるラワ語、(2) カメート語ウィエン・パパオ方言、(3) タコー(Tha Ko)、ホエイサーン(Huai San)などで話され、話し手の自称にしたがってわれわれがビス語と名づけた言語、の3つである。⁽⁹⁾このうち、ビス語はモン・クメール系のラワ語とは全く異っており、ビルマ・ロロ系(Burmese-Lolo)に属するものであってことにビルマ語に著しく近い形式をもっているのである。もっともビルマ語に対応形が見出せない形式も持っている。⁽¹⁰⁾

ところでラオスには“Kha”とよばれる多くの言語がある。一般にはこれらはすべてモン・クメール系であると信じられておりまた事実その多くがその通りなのであるが、その一部がチベット・ビルマ系に属するものであることは実は早くから指摘されている。⁽¹¹⁾しかもそのあるものはビス語とまったく近い関係にあるようである。たとえば、ポンサリ(Phong Sali)のプノイ語(Phu-Noi, Kha Phu-Noi)、同じくウー河(Nam U)上流の“Kha Paille”, 遠くライチャウ(Lai Chau)の“Kha Khong”とビス語との間には次のような共通語彙がある。⁽¹²⁾

(9) たとえば Bunchuai Sisawat: “*Chao-Khao nai Thai*”, Bangkok 1963. や, id. “*Samsip Chat nai Chiangrai*”, Bangkok 1950. などでもこれらをすべて“Lua”として述べている。なお、私は調査中にこのほか、Lua Khun, Lua Yong, Lua Lu, Lua Dam といった名称をきいたことがあるがこれが本当は何を指すのか確認していない。

(10) ビス語については別に西田助教授がその詳細を発表される予定であるからそれを参照されたい。

(11) cf. P. Lefèvre-Pontalis 前掲論文Ⅱ. (1896) および I. JA 8^e sér. 19, 1892. pp. 237-269.

(12) TK., HS, Wr. Bur. はそれぞれビス語タコー方言、ホエイサーン方言、ビルマ文語を表わす。プノイ語は H. Roux “*Quelques minorités ethniques du Nord-Indochine.*” *France-Asie* nos. 92-93. pp. 131-419. による。また“Kha Paille” “Kha Khong”は Lefèvre-Pontalis 前掲論文による。なお、“Phu-Noi”はまた“Kha Phai”ともよばれるが、タイのナーン県(Nan)のカパイ語はモン・クメール系である。cf. Kraisi 前掲論文。

	TK.	HS.	Phu Noi	Kha Paille	Kha Khong	Wr. Bur.
(i) 《 家 》	júm	júm		youm	(pam)	'im
《 火 》	bì	bìthô	bì	bi	bi	mi ²
《 月 》	ʔùhla	ʔùhla	ùlà	oulla	pela	hla ³
(ii) 《 魚 》	lònté	lònté	nótè	yongtè	longtè	(ŋa ²)
《 水牛 》	jô	pôŋhna	yô	yo	panna	(kywai ²)
《 水 》	láng	láng	làng	lang	lâng	(rei)

またカメートがラオスで“Khamet”, “Kha Lamet”とよばれていることはすでに見たとおりである。

もちろん“Lua”と“Kha”が全く同じというわけではないし、だいいちこれらの語そのものの由来は何の関係もないであろう。けれども“Lua”が“Kha”と同じように、さらにいえば著しく並行的に、色々な民族やその言語を指すものならば、カメートが“Lua”とよばれている事実も単純に理解することに躊躇せざるをえないのである。これにはやはり、言語学的に指摘できる事実とは別に何らかの歴史的な説明がなされなければならないと思う。

1.3 北部タイのカメート語について

北部ラオスでは現在でも多くの人人によってカメート語が話されており、近年になってもその話し手たちがカム族とともに国境を越えて主としてチェンライ県 (Chiangrai) に移ってくるという。しかし、その多くは個人的な出稼ぎであって村ごと移住してくることはないといわ⁽¹³⁾れている。

しかし、それとは別に、ウィエン・パパオのカメートのように以前から定着しているものがほかにあるかどうかということになると十分にはわかっていない。パンチョーク村で聞いたカメート族の「歴史」によると、彼らは「かつてチエントン (Chiangtung, Kengtung) にあって、そこからずっと南下し、まずチョムトン (Chomthong) の一帯に村をつくった。その後再び北上してドーイ・サケット (Doi Saket) 近辺に村をつくり、さらにメーカチャン (Mae Khachan) を通ってウィエン・パパオ盆地にたどりついたのだ」という。この話のどの部分が事実を伝えているのかいないのか、またかつてチェンマイ (Chiangmai) 一帯の平地をも支配したといわれる「ラワ」族との関係がどうであるのかまだ私にはわからないけれども、かつてカメート語がチョムトンやドーイ・サケットの一帯で話されていたことは十分に考えられることである。

パンチョーク村のカメート語も早晚忘れられていくであろう。現在でもすでに年少者は北タ

(13) cf. Bunchuai 前掲書 (1963) pp. 221-228.

イ語（チェンライ方言）の方をむしろ第1言語としているようである。⁽¹⁴⁾ 実際、彼らがチェンマイやチェンライに出稼ぎにでた場合はもちろん、ウィエン・パパオの町をはじめ近隣の村でもカメート語を話すことはないから、むしろ北タイ語を話す機会の方が多いのである。

けれども、まったく構造の異った2つの言語の一方が他方に置きかえられるという場合、言語自体の漸次的変化によって強力な方の言語と同じになるというのではなくて話し手たちがついにはどちらの言語だけを話すようになるかということであるから、一方が他方の影響をどの程度まで受けねばならないかということは関係がないと考えるのが常識であろう。このカメート語も確かに北タイ語の影響を受けてはいるがそれは想像されるほど多きくはないのである。⁽¹⁵⁾

本稿では、このカメート語ウィエン・パパオ方言についてまずその音素体系を記述し、さらにカム語・ラワ語という北部モン・クメール系の言語との間にどんな関係が見出せるのかを比較言語学的に考察したい。なお、カメート語のメイン・インフォーマントは当地出身の Tha Kaeopha氏（56才）であって、質問はタイ語と必要に応じて北タイ語を用いて行なった。

2. カメート語の音素体系

2.1 音素体系の記述方法

ある言語の音素体系を記述しようとするとき、その方法の一般的なモデルとして次のような様式が考えられる。

まず、すべての音素についてその音声学的性格を記述しそれらの間の相互関係を明らかにする（狭義の音素論）。次いで、それらの音素がどのように結合してどのような音素結合形式を構成するかを記述する（音素結合論）わけであるが、それらすべてを列挙することは不可能でもあり無意味でもあるから、まず音素をいくつかのクラスに分類して、そのうえでどのクラスの音素とどのクラスの音素とがどのようなクラスの音素結合形式を構成しうるかという形で記述する。さらに結合形式のクラスについて同様の手順を繰返す。ここで、このようにクラス単位で記述した場合、実際にはその言語にはありえないような音素連続をも含めてしまうことがあるから、そのような時には結合の制約としてそれを書き加えておく。

以上が音素体系の記述の一般的モデルであって、とくに音素の結合様式を文法体系のシンタクスと並行的に形式的に整った形で書けるという点で優れている。しかし現実にある言語の音素体系を記述するに際しては、むしろこれを適宜にバラした形で記述する方がその音素体系の

(14) 生活自体ふつうのコンムアンと何ら変らない。昔は額帯で物を運んだり水牛の供犠祭をやったというし、入母屋式の屋根に彫刻をした鎮木があるのは古い名残りかもしれないが、このような例は素人目にはほとんど気づかなかった。

(15) たとえばいわゆる基礎語彙100項目のうちタイ系借用語は7項目しかない。

特徴をより理解しやすく表現できるようである。⁽¹⁶⁾ 次節以下でもカメート語の音素体系をこのようにバラした形で記述するが、元にもどして上述のモデルに従った形で書けばおおよそ次の通りであることをあらかじめ記しておきたい。

(1) 音素目録表

(2) 音素のクラス：子音音素 C，母音音素 V，トネーム T。おのおのいくつかのサブクラスをもつ。

(3) 音素結合：たとえば C の 2 つのサブクラスが初頭子音結合を構成し、それは C と共にクラス C(C) すなわち音節初頭成分に属する。同様に音節の直接構成成分として V(V)(C) が新たなクラスとして定義される。結合の制約によってタイプが分かれる。

(4) 音節：C(C) と V(V)(C) が音節の核を構成し、それとトネームとが音節を構成する。すでに分けられた構成タイプに一致して自立音節，附属音節などサブクラスに分けられる。

(5) 音節結合：附属音節と自立音節が結合して、自立音節と共に、新たに定義されたクラスに属する。等等。

2.2 音節の構成タイプ

カメート語の音節の構成を考えるためには、他の多くのモン・クメール諸語の場合と同じく、音節のサブクラスとして分けられる自立音節（大型音節 major syllable）と附属音節（小型音節 minor syllable）のおのおのについて考えることが適当である。⁽¹⁷⁾ 自立音節は terminal juncture の直前に立ちうる音節であって強勢をとることができその実際のメンバーも多い。附属音節は juncture の直前には立たずまた強勢をとることもない。

その構成においても両者は異っていてそれぞれ次の通りである。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{自立音節} \cdots C(C)V(V)(C)/T \\ \text{附属音節} \cdots C V(C)/T \end{array} \right.$$

ここで、C は子音音素，V は母音音素，T はトネームをそれぞれ表わしている。（ ）は存欠いずれでもよいことを示しているが、自立音節の (V)(C) では共に欠如ということは今のところ許されないとしておく。というのは、強勢のない位置では C(C)V/T の構成をもつ自立音節が見られることがあるからだ、これについては後で述べる。

次に自立音節の各構成成分の位置に立つ音素の音声学的性格を記述する。⁽¹⁸⁾

(16) たとえば、Smalley 氏によるカム語の記述は上述のモデルに従ったものと思われるが、形式的に整っている割には全体がいたずらに複雑なものとなっている。cf. W. A. Smalley: *Outline of Khmu² Structure*. New Haven, 1961. xix+45p.

(17) cf. E. J. A. Henderson: "The main features of Cambodian pronunciation." *BSOAS* 14, 1952. pp. 149-74, 3 plates.

(18) 以下，〔 〕内の音声記号はおおむね IPA に従う。精密記号は当該個所の説明に必要なときにのみ用い、その他は簡略記号を用いた。

2.3 トネーム

自立音節のTの位置に立つ音素すなわちトネームは、カメート語においては(1)高型/ /, (2)低型/ /の2つがある。この系統の言語にはあまりトネームの対立がなく、それに代ってトネームに類似した母音の性質の対立 (quasi-tonal register) ⁽¹⁹⁾が見られるのであるが、カメート語においては音声学的には両者が同時に現われる。すなわち、トネーム/ /をもった音節の母音は普通の場合氣息母音 (breathy vowel) である。e. g. 《魚》kaa[?] [ka:ʔ₅₅] 《バナナ》kàak [ká:k₃₁] しかしこの母音の性質は付随的な特徴であって、別弁的特徴は明らかにトネームの対立である。

トネームの実際のトネーム型はそれぞれ次の通りである。⁽²⁰⁾

(1) 高型トネーム/ /

基本型は [55] [55̂] である。e. g. 《思い出す》cuuu [tɕuu₅₅:] 《犬》so[?] [soʔ₅₅]

連続型は [44] [44̂] である。e. g. 《ミルク》ʔom-pùu[?] [ʔom₄₄-] 《山犬》so(?)-Ri[?] [so(?)44̂-]

(2) 低型トネーム/ /

基本型は [31] [21̂] である。e. g. 《名前》cuuu [tɕuu:31] 《さがす》sô[?] [soʔ₂₁]

連続型は [21~11] [11̂] である。e. g. 《炭》ŋôl-pəɛl [ŋol₂₁-, ŋol₁₁-] 《送る》ti(?)-tɕɛl [ti(?)11̂-]

2.4 初頭子音音素

自立音節の初頭成分 C-, CC- すなわち (初頭) 子音音素18個とその結合の実際のメンバーは次の表の通りである。

p	t	c	k	ʔ						
b	d				pl	—	—	kl	—	—
m	n	ɲ	ŋ		pR	tR	—	kR	hR	mR
	l			R	—	—	—	kw	—	—
w		j			pj	—	—	kj	—	—
f	s			h	ph	th	ch	kh	—	—

このほか稀に三重結合 khw ⁽²¹⁾がある。

(1) 無声閉鎖音 /p, t, c, k, ʔ/

(19) cf. E. J. A. Henderson. *op. cit.*

(20) 基本型は環境 /-#/ (#は pause または terminal juncture) に立つときのトネーム型、連続型は他の音節に連続するときのトネーム型をいう。

(21) /kw/ および /khw/ はタイ系借用語にのみ現れる。

この系列の音素に該当する単音は無声・無気の閉鎖音および破擦音〔p, t, tɕ, k, ʔ〕である。
e. g. 《短かい》pət [pət₅₅] 《布》tɔŋ [tɔŋ₅₅] 《見る》cɔɔm [tɕɔ:m₃₁] 《くび》kɔɔʔ
[kɔ:ʔ₅₅] 《3》ʔɔɔj [ʔɔ:i₅₅]

音素結合 /pl, pj, kl, kw, kj/ における場合も同様である。e. g. 《果物》pleʔ [pleʔ₅₅] 《殺す》pjam [pjam₅₅] 《洗う》klàaŋ [kla:ŋ₃₁] 《～よりも》kwaa [kwa:55] 《目をつぶる》kjaɔ [kjaɔ₅₅] ただし、先行する附属音節の末尾が鼻音である場合は有声音が自由交替的に観察される。e. g. 《天、空》təmpliŋ [-pli:ŋ₅₅~-bli:ŋ₅₅]

/R/ との結合においては無気または弱い出気の閉鎖音である。この際、/k/ は母音 /i/ の前を除いては口蓋垂閉鎖音〔q^(ʰ)〕である。e. g. 《雨》pRiiʔ [p^(ʰ)Ri:ʔ₃₁] 《刀》tRaaɔ [t^(ʰ)Ra:i₃₁] 《くま》kRiis [k^(ʰ)Ri:s₅₅] 《先生》kRùu [q^(ʰ)Ru:31]

出気の無声閉鎖音および破擦音〔p^ʰ, t^ʰ, tɕ^ʰ, k^ʰ〕はそれぞれ音素結合 /ph, th, ch, kh/ と認める。e. g. 《心》pheem [p^ʰe:m₅₅] 《油で揚げる》thɔɔt [t^ʰɔ:t₃₁] 《ずぼん》chul [tɕ^ʰul₅₅] 《木》kheʔ [k^ʰeʔ₅₅]

(2) 有聲閉鎖音 /b, d/

これは単なる有聲閉鎖音〔b, d〕であって、前声門化音や内破音ではない。e. g. 《雲》bot [bot₅₅] 《ベル》den [den₅₅]

(3) 鼻音 /m, n, ɲ, ŋ/

該当する単音は〔m, n, n̥, ŋ〕である。音素結合 /mR/ は〔m[°]R〕であるが、私のノートには《馬》1例しか見出せない。e. g. 《つめ》miim [mi:m₅₅] 《血》naam [na:m₅₅] 《家》ɲàaʔ [ɲa:ʔ₃₁] 《高価な》ŋɔɔs [ŋɔ:s₃₁] 《馬》mRàŋ [m[°]Raŋ₃₁]

(4) L-R 音 /l, R/

/l/ に該当する単音は結合の第2要素の場合も含めて側面音〔l〕である。e. g. 《葉》laaʔ [la:ʔ₅₅] 《ヒル》pliŋ [pli:ŋ₅₅]

/R/ に該当する単音は一般に口蓋垂音であるが種類の異音がある。

単純初頭子音としては、口蓋垂有聲摩擦音〔ɮ〕、弾き音〔R〕、閉鎖音の入りわたり (on-glide) を伴ったふるえ音の〔ʳR〕または〔ʳR〕がおのおの自由異音として観察される。ただし直前の音節の末尾が /ŋ/ のときは弾き音〔R〕のみである。e. g. 《つくる》Rɔɔʔ [ɮɔ:ʔ₅₅~ʳRɔ:ʔ₅₅~...] 《ひざ》pəŋRòoŋ [pəŋŋRò:ŋ₃₁]

結合 /pR, tR, kR/ においては有聲の〔ɮ〕, 〔R〕(ふるえ音)のほか無声の〔χ〕〔R̥〕が自由異音として観察される。e. g. 《リス》pRɔɔk [p^(ʰ)Rɔ:k₅₅~p^(ʰ)χɔ:k₅₅~...] 《水牛》tRaak [t^(ʰ)Ra:k₅₅~t^(ʰ)χa:k₅₅~...] 《いためる》kRua [q^(ʰ)Ru:a₅₅~q^(ʰ)χu:a₅₅~...] ⁽²²⁾

(22) /R/〔ʳR〕と /kR/〔kR̥〕とは対立が曖昧であって、音素形式としていずれであるのか判別しにくいものがある。e. g. 《値が安い》(k)Rɛʔ(?) なお、付属音節の初頭成分としては /R/ と /kR/ とは中和している。cf. 1.7.(2)

前に閉鎖音のない〔χ〕または〔χR〕は音素結合 /hR/ であると認める。《山の精》 hRoɔj
〔χ(R)o:i₅₅〕 《愛する》 hRàk 〔χ(R)ak₂₁〕

(5) 半母音 /w, j/

無摩擦の半母音〔w, j〕である。e. g. 《帽子》 wɔ̃m 〔wɔ̃:m₃₁〕 《耳》 jook 〔jo:k₅₅〕

(6) 摩擦音 /f, s, h/

無声の摩擦音〔f, s, h〕が該当する。音素結合における /h/ についてはすでに述べた。なお、/f/ はタイ系借用語以外には見られない。e. g. 《ゾウ》 k̃saɲ 〔-sa:ɲ₅₅〕 《歩く》 huɪ⁽²³⁾
〔huɪ₅₅〕 《わた》 faaj 〔fa:i₅₅〕 <NT. fāaj

以上の初頭子音音素およびその結合とトネームとの分配関係には、/b, d/ が高型トネームとしか結合しないこと以外には、とくに体系上の制約は認められない。しかし、/?̃, h; ph, th, ch, kh; hR/ と低型トネーム /ʔ/ との結合は稀であり、しかもタイ系借用語に限られている。e. g. 《母》 ?̃uuj cf. NT. ?̃uj 《祖父母》 《鎌》 khiaw <NT. khiaw.

2.5 母音音素

次に、自立音節の -V(V)- の位置に立つ母音音素であるが、これは極めて整然とした9母音システムをもっている。また、9つすべての母音が重複結合 (geminate cluster) を構成することができる。異なった母音の結合は /ia, ua, ua/ の3つである。

i	ɯ	u	ii	ɯɯ	uu			
e	ɤ	o	ee	ɤɤ	oo			
ɛ	a	ɔ	ɛɛ	aa	ɔɔ	ia	ua	ua

(1) 狭母音 /i, ɯ, u/

それぞれ、前舌張唇狭母音〔i〕、後舌張唇狭母音〔ɯ〕、後舌円唇狭母音〔u〕ないし〔U〕が該当する。ただし /u/ は末尾子音 /c, ɲ/ の前では条件異音としてやや円唇の〔ɯ〕となる。e. g. 《小さい》 pɪk 〔pik₂₁〕 《会う》 pɯp 〔pɯp₂₁〕 《～したい》 su[?] 〔sU[?]₅₅〕 《射る》 puɲ 〔puɲ₅₅〕 《売る》 tuɔc 〔tuɔ[?]₅₅〕

(23) NT. は北タイ語。しばしばタイ系借用語について言及するのはそれが Henderson のいう “secondary system” に属すると考えられる場合があるからである。Henderson はビルマ語・タイ語・クメール語などの音素体系において、その言語本来の形式および見かけ上それと全く異なる外来語とを支配する “primary system” と外来語のみを支配する “secondary system” とを区別して記述する。cf. E. J. A. Henderson: “The phonology of loan-words in some South East Asian languages.” *Trans. Philol. Soc.* 1951, pp. 132-58. この議論は話し手の実際の意識ともよく合致して外来語をも含めた場合の音素体系の記述にとって非常に有効であると思う。しかしカメート語とタイ語のようにもともとその “primary system” に大差がない場合には、全体には “secondary system” を考える必要はないようである。

重複結合 /ii, uu, uu/ はそれぞれの長母音 [i:] [u:] [u:] が該当する。《ブタ》lìik [li:k₃₁] 《コウモリ》buuun [bu:ŋ₅₅] 《消す》suul [su:l₅₅]

(2) 半狭母音 /e, ɤ, o/

/ɤ/ は後舌張唇半狭母音 [ɤ] であって中舌母音 [ə] は観察されない。/e, o/ はともにやや広い目の半狭母音でそれぞれ前舌張唇音 [e] 後舌円唇音 [o] である。e. g. 《上る》Rèh [Rɛh₂₁] 《おし》sɤ? [sɤʔ₂₁] 《めくら》pòl [pɔ.l₃₁]

重複母音 /ee, ɤɤ, oo/ はそれぞれの長母音 [e:] [ɤ:] [o:] が該当する。e. g. 《ヤマビル》pleem [plɛ:m₅₅] 《遊ぶ》mɤxl [mɤ:l₃₁] 《夕方》kəlpòol [-pɔ:l₃₁]

(3) 広母音 /ɛ, a, ɔ/

広さは必ずしも対称的ではない。/ɛ/ には前舌張唇半広母音 [ɛ] が、/a/ には張唇広母音の [a] ないし [ɑ] が、また /ɔ/ には広い目の後舌円唇半広母音 [ɔ] ないし広母音 [ɒ] がそれぞれ該当する単音である。e. g. 《つばをはく》p'k [p'k₂₁] 《広い》wàh [wah₂₁~wah₂₁] 《美しい》lòk [lɔk₂₁~lɒk₂₁]

重複母音結合 /ɛɛ, aa, ɔɔ/ はそれぞれ長母音 [ɛ:] [a:~ɑ:], [ɔ:~ɒ:] である。e. g. 《ノミ》tɛɛp [tɛ:p₅₅] 《さる》waa? [wa:ʔ₅₅] 《6》tɔɔl [tɔ:l₅₅~tɒ:l₅₅]

(4) 母音結合 /ia, ua, ua/

-VV # の音節ではそれぞれ [i:a] [u:a] [u:a], -VVC' の音節では [ia] [ua] [ua] である。⁽²⁴⁾ e. g. 《幼い》pia [pi:a₅₅] 《見せる》pia? [piaʔ₅₅] 《のこぎり》lùà [lu:a₃₁] 《軟かい》mùaij [muai₅₁] 《品物》kRùà [qRu:a₃₁] 《ラウ族》lùà? [luaʔ₃₁]

2.6 末尾子音音素

自立音節の -C の位置に立つ末尾子音音素は子音音素のサブクラスであって、次の14個に限られている。

(1) 閉鎖音および鼻音

この系列の音素 /p, t, c, k, ʔ/ および /m, n, ɲ, ŋ/ にはこの位置では、破裂を伴わない無声閉鎖音および摩擦音 [pʰ, tʰ, tɕʰ, kʰ, ʔʰ] および有声鼻音 [m, n, ɲ, ŋ] がそれぞれ該当する。/c, ɲ/ には明瞭なわたり

p	t	c	k	ʔ
m	n	ɲ	ŋ	
		l		
		w	j	
		s	h	

(glide) [ɰ] が観察される。e. g. 《ごはん》ʔuup [ʔu:pʰ₅₅] 《寝る》ʔiit [ʔi:tʰ₅₅] 《なくなる》làac [la:tɕʰ₃₁] 《行く》wàk [wak₂₁] 《似合う》mɔʔ [mɔʔʰ₅₅] 《かみなり》kəlnùum [-nuum₃₁] 《鉛》cùuun [tɕu:n₃₁] 《黄蜂》taan [ta:ɲ₅₅] 《舟》cəlɔɔŋ [-lɔ:ŋ₃₁]

(24) このほかただ1例だけであるが《鹿》[ki:ak] がある。これを /kjiak/ とすべきか、母音結合 /iia/ を認めるべきかなお検討の余地がある。cf. カメ語 /tjaak/。

(2) /l/

メイン・インフォーマントの発音ではこの音素に該当する単音は常に側面音〔l〕であったが、別のインフォーマントはこれをすべて弾き音〔ɾ〕⁽²⁵⁾に発音した。e. g. <2> ?aal [ʔa:l₅₅ ~ ʔa:f₅₅] <7> pul [pul₅₅ ~ puɸ₅₅]

(3) 半母音 /w, j/

これは音節副音的母音の〔u, j〕である。/w/は広くなって〔ɔ〕が観察されることもあるが/i/は〔e〕とはならない。e. g. <うらやむ> khɔɔj [k'ɔ:j₅₅] <水田> kənàaw [-na:ɰ₃₁]

(4) 摩擦音 /s, h/

無声摩擦音〔s〕〔h〕である。e. g. <マッチ> kap-tRòs[-tRòs₂₁] <顔> Rəm̀pòh [-pòh₂₁]

末尾子音音素と母音音素またはその結合との分配関係にはいくつかの体系上の制約がある。

- (1) 単一母音音素は必ず末尾子音音素を伴う。すなわち -V# は存在しない。
- (2) 母音結合 VV と /h/ とは結合しない。⁽²⁶⁾しかし、/?/ は V, VV のいずれとも結合して対立がある。e. g. <ふくろ> pəljàaʔ: <娘> kɔ(ɔ)n-pəljàʔ <男> Rəm̀éʔ: <夫> Rəm̀éʔ
- (3) /c, ɲ, j/ と /i(i), e(e), ɛ(ɛ), ia/ は原則として結合しない。例外的に /ɛc/ があるが /ɛk/ と自由交替しやすい。e. g. <終る> hɛc ~ hɛk。なお、この制約は結合 /uc, uɲ/ を排斥するものではないが、実際には /uc:uc/, /uɲ:uɲ/ がそれぞれ中和音 [ɰi'tɕ] [ɰi'ɲ] となっており一応それを /uc/, /uɲ/ としたから結合 /uc, uɲ/ はないことになる。(/u/ の項を参照)
- (4) /w/ と /ɰ, u, ɤ, o, ɔ/ およびその結合とは結合しない。

以上のほかにも私のノートには見出せない音素連続があるが、それらは実際にはカメート語の音素結合形式として存在するかあるいはいわゆる偶然的あきま (accidental gap) であるかのいずれかであって、体系上の制約から来るあきまではないものようである。

一方、初頭子音(結合)と母音(結合)または末尾子音との間の分配関係は自由であってとくに制約はない。この事実、カメート語の音節の核の直接構成成分が他の多くの諸言語の場合と同じく C(C)- と -V(V)(C) であると考えることが妥当であることを示している。

2.7 弱まり型自立音節

弱まり型自立音節について述べる前に、順序がいささか逆のきらいがあるが2つの音節の結合について考えておきたい。この問題を考えるためには強勢(stress)や連接(juncture)の記述が先行すべきであるが、これらの音素についてはまだ検討の余地があるので余り深く立ち

(25) この -l はもともと *-l と *-r の2つに由来するが、〔l〕〔ɾ〕は互に自由異音であってこの対立が保たれているわけではない。e. g. <2> ?aal <*-r> <銀> kəm̀ùul <*-l>.

(26) (1)(2)から [-Vh] を /-V/ に、あるいは逆に [-V:] を /-VVh/ とすることもできる。[-#]:[-h] は対立しないからである。

入らないことにする。

2つの音節 S_1 と S_2 とが結合する場合、(1) S_1, S_2 とともに強勢をもつ、(2) S_1 が半強勢を、 S_2 が強勢をもつ、(3) S_1 は強勢・半強勢をもたず S_2 は強勢をもつ、という3つの場合がある。そのうえに、その3つのそれぞれについて内部接続 (internal open juncture) がある場合とない場合とがある。しかし大ざっぱに言えば(3)の場合には内部接続は通常存在しない。そこで、強勢と接続とを合わせて、(1)を $/S_1 S_2/$ 、(2)を $/S_1-S_2/$ 、(3)を $/S_1S_2/$ のように簡略化して表記する。もっとも(1)(2)(3)の間は実際には連続的であって、(1)と(2)、(2)と(3)はしばしば連続的に自由交替する。e. g. 《つんぼである》/jook luut/ ~ /jook-luut/ 《書物》/naŋ-stutu/ ~ /naŋstutu/。

さて、附属音節が(3)の S_1 にしか立たないということはすでに明らかであろう。しかし自立音節は(1)(2)の $S_1 S_2$ 、(3) S_2 のほか(3) S_1 の位置に立つものもある(上例 /naŋ/)。この場合、母音は単一母音に限られている(すなわち $C(C)VC/T$) が、ややゆっくりしたスタイルでは重複母音に交替するものがある。e. g. 《いつ》 $\text{ŋám}^{\text{?}}\text{een} \sim \text{ŋám}^{\text{?}}\text{een}$ 。そこで、この位置の自立音節をとくに「弱まり型自立音節」と呼ぶことにする。

弱まり型自立音節にはこのほか $C(C)V/T$ の構成をもった音節が属すると考える。この型の音節は(3) S_1 以外の位置に立たないという点で附属音節と同じクラスに属するが、 $C(C)VV(C)/T$ の型の自由交替形をもつことと各成分の位置に立つ音素の種類が他の自立音節と同じであるということから、この型の音節も弱まり型自立音節に属すると考える方が有利だからである。e. g. 《くわ》 $\text{kəbək} (\sim \text{kəbək-bək})$ 《少年》 $\text{kənum} (\sim \text{kə(ə)n-num})$ 《じん臓》 $\text{bəkəw} (\sim \text{bək-kəw})$ 《タバコ》 $\text{mùli} (\sim \text{mùli-li})$

2.8 附属音節

附属音節 $CV(C)/T$ は構成が自立音節のそれよりも単純であり、各成分となる音素の種類も限定されている。

(1) トネーム

大部分の附属音節は低型トネーム $/ \text{ } [\hat{\text{ }}]$ しかとらない。すなわち、ここでは $/ \text{ } [\hat{\text{ }}]$ の機能負荷量は極めて小さい。⁽²⁷⁾しかし稀に高型トネーム $/ \text{ } [\text{ }]$ をとるものがあるので、附属音節にトネームの対立がないとすることはできない。e. g. 《ひも》 $\text{pəlsɪ}^{\text{?}} [\text{pəl}\hat{\text{ }}]$ 《何》 $\text{sənməh} [\text{sənm}\hat{\text{ }}]$ 《どうして》 $\text{sənməh} [\text{sənm}\hat{\text{ }}]$

(2) 初頭子音素

(27) 自立音節におけるトネームの対立は基本的にもともと初頭子音の有声・無声の対立に由来するが、附属音節ではその対立が十分には保存されていない。e. g. 《たけのこ》 $\text{təpəag} < *də-$ 《骨》 $\text{cəŋ}^{\text{?}}\text{aag} < *cə(\text{ŋ})-$

自立音節の初頭子音のうち次の7個しか附属音節の初頭成分にならない。すなわち, /p, t, c, k; l, R, s/. 該当する単音は自立音節の場合と一般に同じであるが, /R/ は自由異音として⁽²⁸⁾ [q'(R)] も観察される。e. g. 《とかげ》pə̀ltaan [pəl̩-] 《相談する》tə̀lʔuu [təl̩-] 《緑色》cə̀ŋaal [tɕə̀-] 《金》kə̀lcɔʔ [kəl̩-] 《鐘》lə̀paaŋ [lə̀-] 《のみ(鑿)》Rə̀mtòon [Rə̀m̩-~ʔRə̀m̩-~...] 《日》sə̀ŋiiʔ [sə̀-]

(3) 母音音素

附属音節には母音の対立がない。しかし, 《洞穴》tham [t'am₅₅] : 《右側》tə̀ham [tə̀h̩ham₅₅] のような対立があるから音素 /ə/ を認めないことはできない。/ə/ は形式的には自立音節の母音クラスには属さないものである。

/ə/ に該当する単音は中間母音 [ə] または非常に弱まった [ɔ] であるが, 環境によって次の異音が自由交替しうる。(a) 直後の自立音節の母音が /a/ のとき [a], (b) 同じく /o, u/ のとき [ʊ~o], (c) 同じく /e/ のとき後よりの [e]。e. g. 《舌》pə̀ltaak [pəl̩-~pal̩-] 《汗》pə̀lʔul [pəl̩-~pʊl̩-] 《気分がよい》pə̀lŋèeʔ [pəl̩-~pel̩-]

(4) 末尾子音音素

/l; m, n, ŋ/ の4個に限られている。このうち鼻音の系列の音素は後続する自立音節の初頭子音と調音位置が同じであることが多く, 鼻音同士の対立による機能負荷量は小さい。しかし常にそうとは限らないのでこれを /N/ のようにひとつの音素とすることはできない。e. g. 《雨が降る》sə̀lèeʔ [sə̀-] 《豆》sə̀lpàaj [səl̩-] 《目覚める》lə̀mkək [lə̀m-] 《太鼓》sə̀ntuŋ [sə̀n-] 《ひたい》Rə̀ŋmɔʔ [Rə̀ŋ-]

なお, 末尾子音音素と初頭のそれとの分配関係には制約があって, 両者が同じ調音位置のものであってはならない。すなわち, pə̀m-, tə̀n-, kə̀ŋ-, lə̀- は存在しない。

(5) /N/

これは単独で附属音節の核 CVC を構成する音素である。⁽²⁹⁾ 該当する単音は直後の自立音節の初頭子音と調音位置が同じの音節鼻音 (syllabic nasal) である。e. g. 《咲く》N̩klə̀h [ŋ̩-] 《ことば》N̩bɔʔ [ʔ̩-] 《～ない》N- : 《持っていない》/Nkooj/ [ŋ̩-] 《そうではない》/Nmɔ̀h/ [m̩-]

2.9 音節の結合

ここでもう一度音節の結合について簡単に述べておく。

次の3つの音節結合形式が自立音節と同じクラスに属し, 強勢や juncture をとりうる。す

(28) したがって付属音節では実際には /R/ ~ /kR/ である。

(29) C, V いずれのクラスにも属さず, これ自体で CVC と同じクラスに属する。

なわち、(1) 弱まり型自立音節+自立音節、(2) 附属音節+自立音節、(3) 附属音節+附属音節+自立音節。e. g. 《これ》tu²uh 《鼻》sə̀jkùl 《昼間》kə̀lsə̀ŋii²。

ただし、附属音節と自立音節の分配関係には次の制約がある。すなわち両者の初頭子音が同じ調音位置の閉鎖音・鼻音であってはならない。つまり、pə̀(C)p-, tə̀(C)t- などは存在しない。また同様に sə̀(C)s-, lə̀(C)l-, Rə̀(C)R- も存在しない。⁽³⁰⁾

最後に、単語は合成語の場合をのぞいて自立音節1つかまたは上記3つのいずれかをその形としてもっている。これより大きい結合形式をもつ単語は合成語である。また複合語は上記3つのいずれかの形式をとっている。しかし、その逆は成立しない。のみならず、(1)(2)(3)の音節結合形式が常に単語の形であるとは限らない。これらの諸点は形態音素論に属するものであるからこれ以上は立入らないことにする。

3. 比較言語学的考察

3.1 比較の方法

ふつうモン・クメール諸語とよばれる一群の言語が果して本当にひとつの言語系統に属するのかどうかという問題についてこれまでの諸研究は、いささか極論に過ぎるけれども、いわば印象にもとづいたものであった。印象という点ではこのカメート語がラワ語やカム語と共に北部モン・クメール系に属することはすでに明らかである。しかしそれを十分に信頼のおける形で明らかにしようと思えば比較言語学的方法にたよるしかない。それは、これらの諸言語のひとつひとつの単語を克明に比較検討することによって音素の規則的な対応原則を発見し、かつその対応からそれらの言語の過去を再構していくという手順をふむものである。⁽³¹⁾

近年、とくに東南アジアの諸言語のようにいくつもの系統の言語が相互に複雑に接触している場合には、まず言語構造の型を比較することから始めるのが有利だという議論が行なわれている。⁽³²⁾ 確かに人間の言語行動の様式をよりよく理解するために発生的な系統とは無関係に言語構造を類型学的に考察することは必要であって、実際にそれは言語学の初期から試みられてきた。また、いわゆる言語地域 (linguistic area) の考え方が、とくに東南アジアの諸言語の場合、単に系統論だけでは処理しえないような問題について確かに有効であることは現在でもいくつもの事例についていいうるであろう。けれども、それは逆にいえば、地域的現象として言

(30) ただし、文法体系に支配されて《吸おう》/sə̀suup/(= {sə̀-+suup}) といった結合は生じうる。

(31) 過去を再構し系譜づける仕事という点では言語は他の文化諸部門とくらべて著しく有利である。音素体系や形態音韻論的諸規則は話し手たちの評価や意志とほとんどかかわりがないので、機械的なテクニックで作業を進めることができるからである。しかし言語においても意味や表現の分野はそうはいかない。

(32) *Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific*. SOAS, London, 1963. 所収の諸論文。

語構造の型に並行性が見られたとしてもそれが言語の系統的な親属関係と直接に結びつくものではないということであって、言語の系譜を論ずる限りでは構造の型の並行性を指摘するだけでは正しい結論は期待できないのである。

たとえば、カメート語の音素体系をラワ語とカム語のそれと比較してみると、その型においてはカメート語はカム語に著しく類似している一方ラワ語とは相当に開きがある。その例をあげれば、(1) ラワ語には前声門化音素 ($ʔm$, $ʔŋ$, $ʔd$ など) や前鼻音化有声閉鎖音 (mb , $ŋg$ など) があるが、カメート語やカム語にはそれがない；(2) カメート語とカム語には母音の長短の対立があるがラワ語にはない；(3) 逆にラワ語には $-VSC$ (S は半母音) という結合形式があるがカメート語・カム語にそのような形式はない；(4) 末尾子音としてカム語には $/r, l/$ 、カメート語には $/l/$ があるがラワ語にはいずれもない；(5) カメート語・カム語の附属音節には $C(V)C$ 型があるがラワ語は CV 型のみである；等等。それにもかかわらず、いわゆる基礎語彙100項目の中で、カメート語がラワ語と共通であるものが46項目あるのに対しカム語との間には29項目しかない。(カム語とラワ語の共通語彙は20項目)。少なくともカメート語がラワ語よりもカム語の方に著しく近い親属関係をもっているとはいえないわけである。

それでは次に、カメート語・ラワ語・カム語の3つの言語の間に具体的にいったどのような対応関係が発見できるか、どのような共通音素が推定できるかまたはできないかを検討してみよう。ただし、本来これに先行すべきところの、ラワ語・カム語自体の方言間での同様の作業がまだ十分になされていないので、本稿では自立音節の初頭成分のみを主にとりあげて議論したい。⁽³⁴⁾

3.2 閉鎖音の系列

自立音節の初頭子音音素としての閉鎖音の系列については、カメート語・カム語・ラワ語の間の対応が比較的是っきりとしていて、共通音素として $*p$ $*b$ $*t$ $*d$ $*c(?)$ $*j$ $*k$ $*g$ $*ʔ$ の9つが推定できる。一般にカメート語のトネームが高型である音節については無声音が、低型の場合には有声音が、それぞれ初頭子音の共通の来源として推定できる。

(33) $/-aus, -aim, -auh/$ などのこと。この $/i, u, u/$ は主核母音とは別のクラスであるから $/j, r, w/$ と表記した方がよいかも知れない。

(34) 以下、Kmt. はカメート語、MS. はカム語ムアンサイ (Muang Sai) 方言、Th. は「テン」語 (Theng), BL. はラワ語ボールワン方言、UP. はラワ語ウンパイ方言を表わす。このうち、「テン」語は Maspéro の資料によるものであって、実際にはカム語ゲアン (Nghê-an) 方言といってよい。cf. H. Maspéro. "Matériaux pour l'étude de la langue T'èng." BEFEO 47, 1955. pp. 457-507. これは著者の遺稿をまとめたものであり、表記法に統一がなくまた誤植と思われるものが多いから適当に判断して表記しなおしてから引用した。なおその他の言語・方言は私のノートによる。

(1) *p-

カメート語の高型トネームの音節における p- は、カム語 MS. p- Th. p-(<*p-), ラワ語 BL. p- UP. p-(<*p-) に対応する。稀に BL. p- UP. mb- に対応するものがあるが、これについては次のように考える。ラワ語における前鼻音化有声閉鎖音の系列はもともとそのような性質の音素に由来するものではなくて、むしろ末尾子音が鼻音の附属音節または音節鼻音の附属音節(*rəm-, *rən-; *N- など) プラス閉鎖音という結合から生じたものであると思う。そしてその閉鎖音には有声・無声いずれの場合もありうるのである。すなわち、このUP. mb- が *Np-, *Nb- のいずれに由来するかこれ自体からは明らかではないが、カメート語・カム語との対応から逆に *Np- と断定するのである。したがってこの対応系列全体に共通音素 *p- を推定する。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《射 つ》	puñ	piñ	piñ, piŋ	pəuŋ	poiñ
《ぬ ぐ》	puuc		puuc	pauk	pɔic
《鳴きシカ》	poos	puaç		pauh	paus
《折 る》	ŋpuuk	(pak)	(pak)	pɜup	mbɜk
《は し ご》	təmpɔɔŋ	—	—	pɔŋ	mbɔŋ etc.

ただし次の例はラワ語が *b- の対応様式をとっていて例外的である。

《洗濯する》	puh	puh	puh	poh	phoh
--------	-----	-----	-----	-----	------

(2) *b-

カメート語の低型トネームの音節における p⁽³⁵⁾ は、カム語 MS. p⁽³⁵⁾ Th. b-(<*b-), ラワ語 BL. p- UP. ph-(<*b-) に対応する。この対応系列には *b- を共通音素として推定する。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 晩 》	kəlpòol	pùar		məpu	mtua-phu
《で き る》	pèen	pùan	btuan	puun	phuun
《たけのこ》	təpàŋ		tbaaŋ	pɔŋ	phon
《乗 る》	pàk	pàk	bak	pok	phok
《明 る い》	pàh		bah	puah	phuah etc.

(3) *t-

(1) *p- に並行して、Kmt. t-; MS. t- Th. t-(<*t-); BL. t- UP. t-, nd-(<*(-)t-) の対応系列には共通音素 *t- を推定する。この場合 Up. nd- <*Nt- である。

(35) MS. /³/ は第2レジスターを表わす。第2レジスターの音節では母音が氣息母音である。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 手 》	tii [?]	ti [?]	tii	tai [?]	te [?]
《土 地》	kə̌tɛ [?]	pte [?]	pteeh	tai [?]	te [?]
《き の こ》	tiis	tiiç		taih	tas
《か に》	kə̌taam	ktaam		tam	tam
《 舌 》	pə̌ltaak	ntɔ̌ɔk	hntaak	tak	ndak etc.

(4) *d-

(2) *b- に並行的に, Kmt. t- : MS. t- Th. d- (<*d-) : BL. t-, (-)nd- UP. th-, (-)nd- (<*(-) d-) の対応系列には共通音素 *d- を推定する。ラワ語 (-)nd- はこの場合 *Nd-, *Cənd- に由来する。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《熟 し た》	ñtùm		hnduum	tum	thum
《貧 し い》	tùk	tùk	—	tuk	thuk ⁽³⁶⁾
《取 る》	tì [?]	tè [?]	dee [?]	—	—
《低 い》	téem	—	—	ndiam	thiam
《近 い》	ñtə̌ [?]	—	—	sə̌ndai [?]	sə̌ndi [?]

次の例はラワ語が *t- の対応様式をとっていて例外的である。

《走 る》	təl	tàr	dar	ld	lɔ
-------	-----	-----	-----	----	----

(5) *c-(?)

カメート語の高型トネームの c- については対応がはっきりしない。例 (i) ではカム語 c- (<*c-), ラワ語 s- (<*s-)⁽³⁷⁾ に対応するよう見えるが、逆に例 (ii) ではカム語の c- に対してカメート語・ラワ語 s- が対応している。これから考えられるように、共通音素が *s- として推定されたものの一部にさらに *c- にさかのぼるものがある可能性はあるが *c->*s- の条件を明らかにすることはできない。(3.6. *s- 参照)

(i)	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《苦 い》	caŋ	caŋ	caŋ	sɔŋ	sɔŋ

(36) タイ系借用語か。cf. NT. tūk <*duk

(37) 例 (i) のカメート語がカム語からの借用語である可能性もある。そうすれば, Kmt. s- : MS. c- Th. c- : BL. s- の対応系列ひとつだけを考えればよいことになって、むしろこの方が蓋然性は高いと思う。一般にカム語に極端に類似したカメート語形の一部はカム語の借用語である可能性がある。しかしその識別は現段階では困難であるし、たいていの場合いま行なっているこれら3言語の共通態を再構する作業には障害とならないから本稿ではそれらをすべて本来の対応形として扱った。

(ii)

《痛い, ~したい》	su [?]	cu [?]	cu [?] , cuu	so [?]	so [?]
《象》	kəsaŋ	scaŋ	skjaŋ	saŋ	saŋ

(6) *j-

Kmt. c- : MS. c- Th. j-, j(<*j-) : BL. c- UP. ch-(<*j-) の対応系よりには *b-, *d- と並行して *j- を共通音素に推定する。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《足》	cəŋ	cuaŋ	juan	cuaŋ	chuan
《重い》	kəcən	—	—	cian	chian, chuan
《縫う》	cŋ	—	—	cuaŋ	chiñ
《降りる》	cūul	cūur	ju(u)r	—	—

(7) *k-

*p-, *t- と並行的に, Kmt. k- : MS. k- Th. k-(<*k-) : BL. k-, ŋg- UP. k-(<*(-)k-) の対応系列に *k- をたてることに問題はない。ここで BL. ŋg- <*Nk-。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《魚》	kaa [?]	ka [?]	kaa	ka [?]	ka [?]
《こども》	kɔɔn	kɔɔn	kɔɔn	kuan	kuan
《寒い》	kət	kat	—	koat	kot
《雌》	kuun	cmkuun	(cm)kuun	kɜuŋ	⁽³⁸⁾ kɜn
《あご》	kaap	kaap	kaap	ŋgap	kap etc.

(8) *g-

*b-, *d-, *j- と同じく, Kmt. k- : MS. k- Th. g-(<*g-) : BL. k- UP. kh-(<*g-) の対応系列には *g- を推定する。しかし実際には, カム語はその方言間で *g- を推定できる形式が多いのかかわらず, カメート語 k- に対応する例はきわめて少ない。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《考える》	kuət	trkèt	trgət(?)	kuut	chit(<kh) ⁽³⁹⁾
《ねずみ》	ŋkàaŋ	—	—	kuaŋ	khuaŋ
《与える》	kàh	—	—	kuwah	khwah
《とさか》	təlkòoj	—	—	ʔəkui	rəkhui etc.

(38) カム語の意味は《女》。なお, 《女》Kmt. rəpuun BL. ʔəpɜuŋ UP. rəpɜn とは同じ単語族であろう。《めす》UP. pɜn~kɜn。

(39) ラワ語ウンパイ方言では, 前舌母音の前では k-kh-ŋg-ŋ- と c-ch-ñj-ñ- の対立がなくすべて後者の形になっている。なお, Th. trgət は trget の誤植か。

(10) *ʔ-

カメート語・カム語・ラワ語のすべてが ʔ- である対応系列に *ʔ- をたてることに問題はない。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 水 》	ʔoom	ʔom	ʔom	ləʔaum	rəʔaum
《にわとり》	ʔeel	hʔiar	hʔiar	ʔe	ʔe
《 骨 》	cəŋʔaan	cʔaan	(c)ʔaan	səʔan	səʔan
《め し》	ʔuup	—	—	ʔaup	ʔaup
《 私 》	ʔɔɔʔ	ʔoʔ	ʔoo	ʔaiʔ	ʔauʔ etc.

3.3 鼻音の系列

鼻音の系列についても対応が割合に明瞭であって、共通音素として *m, *n, *ŋ, *ɳ をたてることは容易である。またこのほかに種種の条件のもとで *hm *hn *hŋ ; *ʔm *ʔɳ をも推定することができる。

(1) *m- *n- *ŋ- *ɳ-

カメート語の低型トネームの音節における m- はおおむね MS. m- Th. m- (<*m-) : BL., UP. m- (<*m-) に対応する。n-, ŋ-, ɳ- についても同様である。これらの対応系列には共通音素 *m- *n- *ŋ- *ɳ- をそれぞれ推定する。

*m-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 銀 》	kə̀mùul	kmùul	kmuul	inaw	mau
《あ な た》	miiʔ	mèe(?)	mee	maiʔ	miʔ
《 1 》	mòo	mòoj	mooj	—	—
《 男 》	rə̀mɛʔ	—	—	ʔəmaiʔ	rəmiʔ etc.

*n-					
《 尿 》	nùm	nùum	nuum	naum	naum
《 年 》	nùm	nùm	num	nʒum	neum
《ね ら う》	pənɛɛ			nɛ	nɛ etc.

*ŋ-					
《笑 う》	kə̀ŋàas	—	—	ŋwah	ŋwas
《ろうそく》	ŋòol	ŋòor		—	— etc.

*ɳ-					
《緑 色》	cə̀ŋàal	cŋàar	—	səŋa	səŋa
《 日 》	sə̀ŋiiʔ	sɳŋiiʔ	sŋii	səŋaiʔ	səŋiiʔ (<-ŋiʔ)

《 火 》	ɲàl	—	—	ɲɔ	ɲɔ	
《 遠 い 》	sə̀ɲàaj	—	—	sə̀ɲia	sə̀ɲai	etc.

(2) *hm- *hn- *hɲ-

カメート語の高型トネームの音節における m- は, MS. m- Th. hm- (<*hm-), BL. hm- UP. hm- (<*hm-) に対応するものが多い。n-, ɲ- についても同様である。これらの系列には共通形式として *hm- *hn- *hɲ- を推定する。ただし *hñ- を推定できるような対応は見当たらない。

*hm-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 問 う 》	maaň	maaň	maaň(?)	hmaiň	hmaiň
《 つ め 》	miim	—	—	hmaiň	hmaim
*hn-					
《 血 》	naam	—	—	hnam	hnam ⁽⁴⁰⁾
(?)《 大 き い 》	nam	《 多 い 》nam	hnam	—	—
*hɲ-					
《 あ く び す る 》	ɲaap		hɲaap	hɲap	hɲap
《 米 》	ɲɔɔ?	ɲɔ?	hɲɔɔ	hɲɔ?	hɲɔ?

(3) *ʔm- *ʔɲ-

カメート語の m̥, ɲ̥ は (1) とは別にラワ語 BL. ʔm- UP. ʔm- (<*ʔm-), BL. ʔɲ- UP. ʔɲ- (<*ʔɲ-) に対応することがある。一応この対応系列には *ʔm- *ʔɲ- を推定しておく。カム語は *(-)m-, *ɲ- が対応する。

*ʔm-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 あ り 》	Rəm̀ùuc	muuc	hmuuc	ʔmauk	ʔmɔic
《 斧 》	m̀ùj	—	(krmiil)	ʔmau	ʔmɔi
《 焼 畑 》	m̀aal	—	—	ʔma	ʔma
*ʔɲ-					
《 か ゆ い 》	ɲ̀aa?	ɲ̀a?		-ʔɲa?	-ʔɲa?
《 目 》	ɲ̀aaj	—	—	ʔɲea	ʔɲai

上例《あり》のカム語形は *hʔm- <*s(r)ʔm- (?) が仮定されるであろう。(cf. クメール語 srɔmaoc)

カメート語の環境 /-m-/ における b- (高型トネーム) に対してもラワ語 *ʔm- が対応している。この系列にも同じ *ʔm- を共通音素として推定しておく。すなわち、カメート語では

(40) カム語 MS. màam Th. maam <*maam は同源であろうか。

*-m[?]m- > -mb-, その他では *(-)[?]m > *(-)m- の過程を考えるのである。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《唾 液》	([?] om-)bɛl	—	—	[?] mɛ	[?] mɛ
《クシャミする》	təmbɛs			[?] mɔih	[?] mɔs
《せ き す る》	Rəmbok			[?] moak	[?] mauk
《新 し い》	təmbah	me [?]	hmee	—	—

この場合もカム語《新しい》は *h[?]m- < *t(h)[?]m- が推定される。(cf. クメール語 t(h)mɔj.)

なお鼻音の系列では次のような不規則対応がある。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.	
《 星 》	Rəmuñ	srmeñ	slmeŋ	sə [?] bɜuŋ	sə [?] moiñ	<* [?] m(?)
《 口 》	mòom	—	—	[?] əmbɔm	rəmbom	<(?)
《在 る》	ŋòot	(jàt)	(jat)	[?] auk	[?] aut	<* [?] ŋ(?)

3.4 半母音の系列

半母音の系列にはあまり対応例が見出せないので詳細は明らかでないが、上述の鼻音の場合と並行的に考えれば次のように対応をまとめることができる。

(1) *j-, *w-

Kmt. j- : MS. j- Th. j- (<*j-) : BL. j- UP. j- (<*j-) の対応には *j- を、また、Kmt. w- : MS. w- Th. v-, w- (<*w-) : BL. v- UP. v- (<*v-) には *w- を共通音素として推定する。ただし、カメート語《目をつぶる》 kja[?]p の高型トネームについては(4)参照。

*j-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《泣 く》	jàam	jàam	jaam	juam	juam
《目をつぶる》	kja [?] p		(kn)ja [?] p	jiap	jiap
《死 ぬ》	jàm	—	—	jum	jum

*w-

《広 い》	wàh	lwàh		vuah	vuah
《 左 》	(tə-)wè [?]	-wè [?]	vee	(kə-)ve [?]	-ve [?]
《帽 子》	wɔm	—	—	vom	vom etc.

(2) *hj- *hw- ; [?]j-

きわめて例が少ないにもかかわらず、次の対応の由来として共通音素 *hj-, *hw-, [?]j- を推定することができる。

*hj-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 耳 》	jook	—	—	suak	suak ⁽⁴¹⁾
*hw-					
《 サ ル 》	waaʔ	waʔ	hwaa	fuaʔ	fuaʔ
*ʔj-					
《 村 》	jèŋ	—	—	ʔjuan	ʔjuan

3.5 R-L音の系列

(1) *r-, *l-

Kmt. R^h : MS. r^h Th. r-(<*r-) : BL. r- UP. r-(<*r-) の対応系列に *r- を推定することとは問題がない。Kmt. l^h <*l- についても同様である。

*r-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 根 》	R ^h ɛs	riag	hria(?)	rɛh	rɛs
《 ハ エ 》	-R ^h ɔj	rɔj	rɔj	roi	rua
《 カ エ ル 》	R ^h ok	ròk	rok	roak	rauk etc.
*l-					
《 こ と ば 》	ŋlɔʔ	rlɔʔ	ʔrloo	—	—
《 ブ タ 》	liik	—	—	lɔic	leic
《 黒 い 》	lànŋ	—	—	lonŋ	lonŋ etc.

(2) *hr-, *hl-

Kmt. l^h : MS. l^h Th. hl-(<*hl-) : BL. hl- UP. hl-(<*hl-) の対応系列には共通音素 *hl- がたてられる。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 葉 》	laaʔ	laʔ	hlaa	hlaʔ	hlaʔ
《 恐 れ る 》	laat	—	—	hlat	hlat
《 高 い 》	leenŋ	—	—	hloanŋ	hlaunŋ etc.

これに対して、カメート語に高型トネームの R- があるにもかかわらず共通音素 *hr- に由来するものは hr- であるようだ。カム語 MS. r- Th. hr-(<*hr-)、ラウ語 BL. hl- UP. hr-(<*hr-) に対応する。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《 薄 い 》	hriil	—	—	hlɔi	hre

(41) cf. ラウ語ラウップ (La Up) 方言 hjuak. (D. Schlatter 氏による)

《山の精》 hRooj hrooj⁽⁴²⁾ hrooj — —

(3) *ʔr-, *ʔl-(ʔ)

Kmt. R^h : MS. (-)r^h Th. (-)r- (<*(-)r-) : BL. ʔd- UP. ʔr- (<*ʔr-) の対応系列には *ʔr- を, また, Kmt. l-, l^h : MS. (-)l^h Th. (-)l- (<*(-)l-) : BL. ʔd- UP. ʔl- (<*ʔl-) の対応系列には *ʔl- をそれぞれ共通音素として推定しておく。ただしカメート語のトネームについても十分説明がつかないからなお疑問の余地がある。

*ʔr-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《つ の》	Rùŋ	n(t)rùŋ	cndruŋ	ʔdʒuŋ	ʔrɛn
*ʔl-					
《舟》	cə̀lɔŋ	clɔŋ	clooŋ	—	ʔloŋ
《長い》	leen	—	—	ʔdaŋ, ʔduŋ	ʔlan

(4) *(C)r-, *(C)l-

共通形式として *pr-, *kl- がたてられる場合については後で述べるが、それとは別に、r-, l- を第2要素とする結合で第1要素の対応がよくわからない場合がある。これについてはとりあえず r, l だけに注目して *(C)r-, *(C)l- としてまとめておく。トネームとレジスターもそれぞれの言語においての第1要素のもともとの性格（有声・無声の対立）によるからかならずしも互に一致していない。

*(C)r-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《砂》	pRɛh	sreh	sree	—	—
《森》	-Riʔ	priʔ	bri	—	—
*(C)l-					
《速い》	kles	làç	leeh	(klaic)	(klaic)
《脚》	cə̀lùʔ	plùʔ	(LP. bluʔ)	—	—
《運ぶ》	tə̀lām	klam	klam	klɔm	klom

3.6 摩擦音の系列

(1) *s-, *h-

Kmt. s- : MS. s- Th. s- (<*s-) : BL. s- UP. s- (<*s-) の対応系列には当然 *s- が共通音素と考えられる。Kmt. h- : BL. h- UP. h- (<*h-) に対応するカム語形は見出せないが⁽⁴³⁾

(42) MS. hrooj は “inter-dialectal borrowing” か。一般に共通カム語 *hr- に由来するムアンサイ方言形は第1レジスターの r- である。e.g. 《焼畑》MS. reʔ Th. hree LP. hreʔ <*hreʔ. (LP. はルアンプラバン方言, Smalley 上掲書による)。

(43) もちろん共通カム語には *h- が存在する。e.g. 《死ぬ》MS. haan Th. haan LP. haan <*haan.

*s- と並行して共通音素 *h- をたてる。

*s-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《し ら み》	si [?]	se [?]	see	səi [?]	se [?]
《い め》	so [?]	so [?]	soo(?)	so [?]	so [?]
《 鳥 》	siim	siim	siim	saiñ	saim
《 夜 》	-seem	psuam	psuam	-saum	-saum etc.

*h-

《歩 く》	huul	—	—	həu	heu
《水浴する》	huum	—	—	haum	haum
(?)《ハ チ》	təlhaj	—	—	hɛ	hɛ

3.7 初頭子音結合

以上述べてきたもののほかに、はっきりと共通形式を再構できるものに、*r *l *h を第2要素とする初頭子音結合がある。第1要素は閉鎖音 *p *t *d *k と摩擦音 *s- であって、これらが単純初頭子音となっている場合と同じく無声音ではカメート語が高型トネーム、有声音では低型となっている。ただし、この場合も単純子音 *h- と同じくカム語には *-h- の対応形が見出されない。

(1) *pr-, *pl-, *ph-

Kmt. pR- : MS. pr- Th. pr- (<*pr-) : BL. phr- UP. pr- (<*pr-) の対応には *pr- を、
Kmt. pl- : MS. pl- Th. pl- (<*pl-) : BL. pl- UP. pl- (<*pl-) の対応には *pl- を、また、
Kmt. ph- : BL. ph- UP. ph- (<*ph-) には *ph- をそれぞれ共通形式として推定する。

*pr-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《古 い》	pRiim	priim	—	phraiñ	praim
《ひょう(雹)》	pReel			phrɛ	prɛ

*pl-

《果 物》	ple [?] -	ple [?]	plee [?]	pləi [?] -	ple [?] -
《ヤ マ ビ ル》	pleem	pluam		plaum	plaum

*ph-

《 心 》	pheem	—	—	ʔəphaum	rəphaum
《 5 》	phan	—	—	phoan	phɔn

次の例では第2要素の対応が不規則である。

《屋 根》	plan		pran	phran	pran
-------	------	--	------	-------	------

(2) *tr-, *dr-

例が少ないけれども、次の2例に対して共通形式 *tr-, *dr- を推定する。ラワ語には thr- tr- ndr- といった結合が全くないが、もともとの *tr-, *dr- は khr- kr- ngr- に含まれて⁽⁴⁴⁾いると考えるのである。なお、ここで ngr- <*(N)gr- <*(N)dr- である。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《水 牛》	tRaak	traak	trak	khrak	krak
《床 の 下》	tRùum	ntrùum		ngraum	-ngraum

(3) *kr-, *kh-

Kmt. kR- : BL. khr- UP. kr- (<*kr-) には *kr- を、また、Kmt. kh- : BL. kh- UP. kh- (<*kh-) には *kh- を共通形式とする。カム語にも *kr-, *kl- に由来するものはあるがカメート語・ラワ語と対応する例は見出されない。

*kr-	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《く ま》	kriis	—	—	khrəih	kres
*kh-					
《 月 》	khe?	—	—	khəi?	khe?
(?)《 木 》	-khe?	—	—	khəu?	kho?

(4) *sl-

やや特殊であるが次の例に *sl- をたてる。この例から前にあげた *hl- の一部がさらに *sl- に由来することが考えられる。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《つ ん ぽ》	luut	sluut	sluut	hlauk	hlaut

3.8 母音音素

卒直にいうと、カメート語・ラワ語・カム語の3つの言語がその共通段階においてどのような母音音素やその結合をもっていたのかを全体にわたって推定することはまだ十分にできていない。ラワ語の方言間の母音の対応を私のノートによって整理する作業が完了していないからである。したがって、以下にはいちおう対応の説明がつけられる2~3の例だけをとり出して論じたい。断片的ではあるけれども、これらの言語の親属関係を説明するうえである意味では上述の初頭子音の対応以上に説得力をもっているし、逆にラワ語の方言間の対応を整理するための手がかりともなるからである。

まず、対応が最もはっきりしているのはカメート語 aa であって、次の対応をしめす。

(i) Kmt. aa : MS. aa Th. aa (<*aa) : BL. a UP. a (<*a)

(44) このような音変化は北タイ語にも見られる。e.g. 《用意する》kiam <*triam! 《ラベル》kăa <*traa!

(ii) Kmt. àa : MS. àa Th. aa (<*aa) : BL. uia UP. ua (<*a)

すなわち、カメート語のトネーム、カム語ムアンサイ方言のレジスターの対立は、ラワ語では母音の対立として現れているのである。ただし、末尾子音 -ñ の前では BL. aiUP. ai である。

(i)	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《あ ご》	kaap	kaap	kaap	ŋgap	kap
《水 牛》	traak	traak	trak(?)	khvak	krak
《間 う》	maañ	maañ	maañ	hmaiñ	hmaiñ etc.

(ii)	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《泣 く》	jàam	jàam	jaam	juam	juam
《てのひら》	tàak	—	—	ʔəndwak	rəthwak etc.

また、末尾子音 -ʔ, -h の前ではカメート語の aa, a と同じ対応を示していて、この環境ではもともと aa : a の対立がなかったことを推測させる。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
(i) 《葉》	laaʔ	laʔ	hlaa	hlaʔ	hlaʔ
《し っ ぽ》	ŋtaʔ	ntaʔ	hntaa	sətaʔ	sətaʔ
《放 す》	kah	kah	kah	kah	kah etc.
(ii) 《家》	ñaaʔ	—	—	ñtuaʔ	ñtuaʔ
《明 る い》	pàh		bah	puah	phuah etc.

以上から考えれば、前に

《か ゆ い》	ŋàaʔ	ŋàʔ		-ʔŋaʔ	-ʔŋaʔ
---------	------	-----	--	-------	-------

の初頭子音として *ʔŋ- を推定したことが正しかったといえる。しかし、逆に、

《サ ル》	waaʔ	waʔ	hwaa	fuaʔ	fuaʔ
-------	------	-----	------	------	------

の対応についてはなお説明の必要があることもわかる。

次に、カメート語の ee と MS. uia Th. ua(<*uia) とは規則的に対応する。ところが、以下の例にも見えるように、ラワ語では BL., UP. au, u, uu, ua の4つが対応していて、一見これらの来源が異なるかのように見える。しかし私はこれらがすべて同じ来源に由来し、ラワ語では初頭子音がもともと持っていた有声無声の対立(カメート語でトネームの対立になっているもの)のほかに末尾子音の調音位置の相異によって上記4種の対応形が生じたものと解釈する。もっともそれがもともとどんな母音であったか推定することはさしひかえたい。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
(i) 《ヤマビル》	pleem	pluam		plaum	plaum
《心》	pheem	—	—	ʔəphaum	rəphaum

(ii)《おいしい》	ñèem			ñum	ñum
(iii)《できる》	pèen	pùan	buam	pwn	phum
(iv)《足》	cèen	cùan	juam	cuan	chuan
《村》	jèen	—	—	?juam	?juam ⁽⁴⁵⁾

なお、次の例ではカメート語だけが不規則な対応を示している。

《夜》	-sɛɛm	psuam	psuam	-saum	-saum
-----	-------	-------	-------	-------	-------

ラワ語において末尾子音のもとの調音位置の相異によって対応がわかることを最もよく説明するのは、カメート語 uu : カム語 MS. uu. Th. uu (<*uu) に対応する系列である。この系列に対してラワ語は少なくとも次の3つのしかたで対応する。(i) 末尾子音がもと両唇音のとき BL. au UP. au : (ii) 同じく歯茎音のとき BL. au UP. au; (iii) 硬口蓋音のとき BL. au UP. oi。いまのところ私はこの3つの対応系列は共通ラワ語 *au によって説明できている。ボールワン方言には au#, auk, aup はあるが aup, aut, auc は結合の制約によって存在しない。したがって、*aup > aup, *aut, *auc > auk の過程を推定することができる。一方ウンパイ方言に au(C) がまったく存在しないからすべて *au(C) > au(C) と考えてよい。ただし oic についてはさらに *auc > *au(i)c > oic の過程を経なければならない。このようにしてこれら3つの対応系列にもただ1つの由来を考えることができるのである。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
(i)《めし》	?uup	—	—	?aup	?aup
《水浴する》	huum	—	—	haum	haum
《床下》	trùum	ntrùum		ŋgraum	-ŋgraum
(ii)《つんぼ》	luut	sluut	sluut	hlauk	hlaut
《銀》	kəmùul	kmùul	kmuul	mau	mau
(iii)《ぬぐ》	puuc		puuc	pauc	poic
《アリ》	Rəmùuc	muuc	hmuuc	?mauc	?moic

もっともこれには次の例外がある。

《垣根》	təlpùm	—	—	?əpum	rəphum
------	--------	---	---	-------	--------

このほかカメート語の ii, w などの対応も説明がつけやすいが省略する。いずれにせよ、母音音素とその結合については、初頭子音とは反対に、カム語・カメート語がより保守的でありラワ語の方はさまざまな条件のもとで変化してしまったといえる。

(45) ほかに無声音+この母音+軟口蓋音の例が見つからないから、前にこの例に推定した *?j- が正しいか誤りかこの限りではわからない。

3・9 末尾子音音素

前節でも見たようにラワ語では先行する母音音素と関連して末尾子音の調音位置が変化している。一方カメート語やカム語にはそういった現象はない。これは逆にいえば対応例においてラワ語だけが異った調音位置の末尾子音をもっている、それがラワ語における母音と末尾子音の分配関係によって説明できる限り、カメート語やカム語の末尾子音から共通音素を推定してさしつかえないことになる。たとえば、

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
(i) 《寒 い》	ket	kat	—	koat	kət
《鉄 砲》	sinàat	snaat	snaat	sənat	sənat
(ii) 《つ ん ぽ》	luut	sluut	sluut	hlaʉk	hlaut
《寝 る》	ʔiit	—	—	ʔaic	ʔaic

この例において (i) に $*-t$ をたてるのと同じく (ii) にも共通音素 $*-t$ を推定してよい。なぜなら、BL. aut, BL., UP. ait は存在しないので、 $*aut > auk$, $*ait > aic$ の過程を考えることができるからである。本稿でラワ語の記述言語学的な考察を全面的に行なうことができないが、個々の例についてこのような考え方に基づいて検討することは何ら困難ではないだろうからこの点はすでにわかったものとしておく。

(1) 閉鎖音および鼻音の系列

いちいち対応は掲げないが、共通音素として閉鎖音 $*-p$ $*-t$ $*-c$ $*-k$ $*-ʔ$, 鼻音 $*-m$ $*-n$ $*-ŋ$ $*-ŋ$ を推定することに何ら問題はない。⁽⁴⁶⁾ e. g. 《あくびする》 ηaap 《寒い》 ket 《アリ》 $Rəmùuc$ 《舌》 $pə̀ltaak$ 《私》 $ʔəʔ$ 《鳥》 $siim$ 《こども》 $koon$ 《射つ》 $puñ$ 《骨》 $cə̀ŋʔaaŋ$. etc.

(2) L-R 音の系列

ラワ語には末尾子音として L-R 音はなく、カメート語は $-l$ しかないがカム語によって共通音素 $*-l$, $*-r$ の2つが推定される。すなわち Kmt. $-l$: MS. $-l$ ($<*-l$) : BL. $-#$ UP. $-#$ には $*-l$ を、Kmt. $-l$: MS. $-r$ Th. $-r$ ($<*-r$) : BL. $-#$ UP. $-#$ には $*-r$ を推定する。e. g. 《銀》 $kəmùul$ $<*-l$ 《にわとり》 $ʔeel$ $<*-r$. etc.

したがってカム語の対応形がない場合カメート語の $-l$ が $*-l$, $*-r$ のいずれに由来するかはわからないわけである。e. g. 《歩く》 $huil$. 《火》 ηal etc.

(3) 半母音の系列

ラワ語では母音が2重母音化した場合に末尾子音の $-i$ が消失したと考えて、Kmt. $-j$: MS. $-j$ Th. $-j$ ($<*-j$) : BL. $-(i)$ UP. $-(i)$ ($<*-i$) の対応系列には $*-j$ を推定することができる。

(46) すでに掲げてきた対応例を見れば十分であると思うから、ここにはカメート語形を1つずつ掲げて重複をさけることにする。

	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《ハ エ》	-Ròoj	ròoj	rɔɔj	roi	rua
《目》	ɲàaj	—	—	ʔɲea	ʔɲai etc.

しかしはっきりと *-w が推定される対応例はタイ系借用語に限っていて、これら3つの言語の共通段階に本来の *-w があったかどうか明らかではない。

《ね こ》	mɛɛw	mɛɛw	meew(?)	meau	mɛu	NT. meɛw
《ば かな》	ɲàaw	—	—	ɲoa	ɲau	NT. ɲâaw

(4) 摩擦音の系列

Kmt. -s : MS. -ç Th. -h(<*-s) : BL. -h UP. -s(<*-s-) の対応には *-s を、また全方言 -h の対応には *-h を推定することができる。e. g. 《きのこ》tiis 《なきシカ》poos; 《明るい》pàh 《洗濯する》puh etc.

(5) 開音節について

奇妙なことにカメート語・ラワ語・カム語の共通形式として開音節すなわち末尾子音をもたない形式を推定できるのはタイ系借用語以外にはないのである。一方上に述べた *-ʔ, *-h の対応例は随分と多い。この事実は *-ʔ か *-h のいずれかが実際には末尾子音としての機能をもたなかったことを思わせるのである。⁽⁴⁷⁾

4. む す び

以上、カメート語ウィエン・パパオ方言について、まずその音素体系を記述し、そのうえでラワ語・カム語各方言と間の関係を比較言語学的に検討した。その結果、自立音節の初頭子音にはこれらの言語の間はかなりはっきりとした対応があってそれから推定される共通音素の体系がカメート語のそれよりかなり複雑であることを知った。また母音と末尾子音についてはラワ語がこみ入った対応をしめし一見無原則のようであるけれども初頭子音や末尾子音のもともとの性格を考えれば案外少数の規則的な対応系列にまとめることができるらしいこともわかった。全体としてこれら3つの言語がある時代には少なくともその基本的な部分が互に等しいような方言から変化してきたものだということを部分的ではあるが具体的に明らかにしえた。

けれどもその過去の言語がどのような体系をもっていたかを全体的に推定するためには、母音の問題もそうであるが、まだまだ沢山の事がらが解決されなければならない。たとえば、本稿では付属音節の対応についてふれなかったが、付属音節には(i)一応共通形式が推定できるものと、(ii)ほとんどあるいは全く推定できないものがある。

(47) これを仮に *-ʔ とすると、共通段階では *-k: *-h: *-ʔ ~ -# という対立しかなかったことになる。

(i)	Kmt.	MS.	Th.	BL.	UP.
《緑 色 の》	cəŋaal	cŋaar		səŋa	səŋa <*cə-
《 骨 》	cəŋʔaan	cʔaan	(c)ʔaan	səʔan	səʔan <*cə(ŋ)-
(ii)					
《 舌 》	pəltak	ntɕk	hntak	tak	ndak
《土 地》	kətɕʔ	ptɕʔ	ptee	taiʔ	teʔ

また、これに関連して接頭辞・挿入辞などの形態論的な問題がある。はっきりと推定できる接辞は決して多くはないと思うけれども、たとえばカメート語《死ぬ》jəm>《殺す》pjam, カム語《死ぬ》haan>《殺す》phaan のように明きらかな例もある。

これらの問題は、このほかの“Kha”諸語やビルマのパラウン語(Palaung)やワ語(Wa)など少なくともいわゆる北部モン・クメール系の諸言語との全般的な比較考察によらなければ、おそらく十分には解決しえないであろう。またそうしてはじめて、モン・クメール諸語の比較言語学的な研究がどうにか形をなしはじめることと思う。

参 考 文 献

- 1) P. Lefèvre-Pontalis: “Notes sur quelques populations du nord de l’Indochine.” *JA* 8^e sér. 19, 1892, pp. 237-69; 9^e sér. 8, 1896, pp. 129-54; 291-303.
- 2) W. Schmidt: “Die Palaung-, Wa-und Riang-Sprachen des mittleren Salwin” (Anhang an “Grundzüge einer Lautlehre der Khasi-Sprachen in ihren Beziehungen zu derjenigen der Mon-Khmer-Sprachen”) *Abh. bayr. Akad. Wiss.* I. Kl., Bd. 22, Abt. 3, 1904, pp. 778-806
- 3) Sanidh Rangsit: “Beitrag zur Kenntnis der Lawasprachen von Nord-Siam” *Anthropos* 37-40, 1942-5, pp. 688-710.
- 4) R. Shafer: “Études sur l’austroasien” *BSL* 48, 1, 1952, pp. 111-58.
- 5) H. Maspéro: “Matériaux pour l’étude de la langue T’eng” *BEFEO* 47, 1955, pp. 457-507.
- 6) W. Smalley: *Outline of Khmuʔ Structure*, 1961, xix+45. pp.
- 7) Kraisri Nimmanahaeminda: “The Mrabri Language” *JSS* vol. LI pt. 2, 1963, pp. 179-84, Appendix I.